

世界一短い小説

六甲学院80期

はじめに

編集委員をやらせていただいた A 組の穴戸です。

今回編集する際に重きを置いたのは、いかに個性を際立たせるかということでした。しかし、ただ個性を強調しても、全体がバラバラになるだけで、一つの作品とは言えなくなってしまうでしょう。そこで私たちが行ったのが、作品の並び替えです。「これとこれは似た作品だから並べてみよう」とか、「この作品の後にこれをもっとくれば、また違う顔になるな」などといった、編集委員のこだわりが詰まったものになっているはずですよ。ただ流し読みするのではなく、どんなつながりがあるのかといったところも意識しながら読んでみると、さらに面白いものになるはずです。

それでは、楽しんで読んでください！

編集委員 穴戸光太郎



目次

はじめに	2
一 人は百年 亀は万年 〈人生〉	4
二 若気の至り 〈恋愛・青春〉	25
三 すらまっばぎー 〈日常〉	33
IV 二文間の冒険 〈SF・冒険・ミステリ〉	52
△ 半分、黒い。 〈ユーモア・ダークユーモア〉	64
△ 屋根裏の哲学者 〈哲学〉	75
△ 交響曲第9番 「80期より」	86
あとがき	98

I 人は百年

亀は万年

〈人生〉

亀

亀、遠くまで歩く。

ポグバ

後悔

大体大腿骨

男はひたすら前に進んだ、もう何も分からない。行き止まりだ、戻らないと。しかしそこに元来た道はない。



諦念

人

彼はまっすぐまっすぐ歩き続けていた。ふと後ろを振り向くとそこには誰もいなかった。それでもまた歩き続けた。最初から誰もいなかったのだと言い聞かせて。

分岐点

原田 真位家流

彼は歩いた。止まることなく。彼のウシロには道ができ
た。彼のマエには光が現れた。一音が聞こえた。しか
し、もう遅かった。彼は光を見失い、ただひたすらに歩き
続けた。



人生

デッカード・シヨウ

私は今、歩いている。何をすればよいのか、わからない。
落とし穴は何 m 先にあるのだろうか。

途方

いそすたの申し子

僕は進む、ひたすら。紺色に染まった世界を、ただひたすら。天井にまばらに広がる綿飴をも寄せ付けない赤く光った一点の光だけを頼りにして。



夢

ありもっち

六月八日、初めて一步踏み出た。十月十日、少し後退りした。二月十三日、それでも私はそこに立っていた。

生にかける

浅葱 トコ

私達は目隠しをして走っている。私は目も回っていないのに真っ直ぐ走れていない。でも隣のヤツはなんともなしにうまく駆けていく。



無限

今者

彼は走った。しかし、どこまで走っても同じ景色。これは夢だと彼は思った。しかし、夢は覚めなかった。

体内時計

ゴンザレス

目が覚めた時、僕の体には金属が住み着いていた。



盗み

小川周平

魔が差した時、双方の心に雲がかかった。気付いたら島に流されていた。

嘘

中学受験生

親は嘆く僕にこう言った。「受験に受ければ、たくさんあそべるよ」と。小さな僕は信じてしまった。けれど、あれから数年、もう遅いが気づいてしまった。「変わらなくね？」
こんなに大きな嘘は無い。



無駄

村人C …くらいかな

その日を迎えるまでは、私は学歴に執着し、将来の夢を抱き、懸命に生きていた。しかしその日、ぼんやりとこれからの人生について考えていた私は、気づいてしまった。それから私は、全てがどうでも良くなった。

人

こた

僕は社会に出た時に気付いてしまった。

「人」という字は人と人が支え合っていると解釈されがちだが、実際は一方がもう一方にもたれかかって楽しんでいるだけだということに。



SNS

東野赤褐色

またか。罵詈雑言の嵐が飛び交う。人はなぜ言葉で人を殺せるようになったのだろう。

正しさって？

たいやき

「どうしてそこまで人を傷つけようとするの?」「なんでもってそりゃ正しいことだからだろう?」「どうしてそれが正しいことなの?」彼は何も答えず、何処かへ行ってしまった。



カブトムシ

ハピロ

初めて空を飛び、飛ぶことの楽しさと世界の広さを知った。
次に目が覚めると、せまい虫籠の中にいた。

らせん

関心の無い蛇

彼は終わりのないらせん階段を、無心で登る。登っては休むを毎日同じように繰り返す。「もう飽き飽きだ」とつぶやくと、彼はそこから飛び降りてしまった。



メモント・モリ

沢渡 貴樹

また新しい一日が始まろうとしていた。彼にとつてはつまらない日常であった。コーヒーもいつもと同じ味がした。しかし、それはすぐそこまで迫っていた。

翼

おうおう

一人の男は自由に空を飛ぶことが夢だった。彼は翼を授かるというエナジードリンクを見つけた。彼はそれを飲みマシオンから飛んでみた。彼は死んでしまったが、同時に彼の夢は叶った。



非力

寝耳にミミズ

「大人って子どもだなあ」行列の最後尾からこう叫んだ、
彼のことを振り返るものはいなかった。

感情

きゆう

ある男は「怒り」を落ち着かせるために「感情屋」へ行った。男が「怒り」を買い取ってもらう時、店の人はこう言った。「『怒り』は0円です。」



見えないルール

ビザ

僕は誰かに押されて「ここ」に入った。「ここ」で僕は自分を削り、色を付けた。じゃないと「ここ」から追い出されるから。ああ、また違う色の奴が一匹、「ここ」から出された。

二つの物

山森海人

あるものはすぐ消えた。別のものはずっと自分につきまとい続けている。どちらが大切なのかは自分にはわからない。



兄

まっくろくろすけ

ある日弟である僕はずっと大切にしてきた絵本を手放した。だが、それと同時にずっと大切にするだろう弟が生まれた。そして僕は兄となった。

混ざる

Aさん

年をとるにつれて、私は消えていき、溶けていった。周りへと、そして周りからも。



大事な何か

颯欺

ただ広い色の無い自由なせかい、ただ独り私はある。
大事な何かと引き換えにしたせかいにはもう薔薇の香り
はしない

自分

ヨーグると

心の弱い君に全てあげる。君が僕として生きることで周り
の人間、そして僕によって君は自分を生きるだろう。



幻像と原像

露霸亜斗

私達の目に写っているものは「げんぞう」だった。それは幻像だったのか、それとも原像だったのか。誰もが答えを追い求めているがわかった者はもういないだろう。

衰退

松尾蛙

私も町を出た。思い出がすべて流されてしまった。町に戻ることはできるだろうか。



笑顔

ジュ モン太

彼の目の前に小川が流れた時、その男はすべてを捨て、笑った

お花畑

幸福安心委員会

彼はずっと前からお花畑を整えている。これからも花を摘みそして植え続けていく。



もう1度

土内 楽

嵐が来た。しかし今の彼には傘がある。

やる気

シュウペイ

壁に出会おうとそれはやってくる。彼は何かしないと次の日起きるとなにもない。



壁

禄 項世

彼は壁を登り続けた心が折れてポロポロになってきえも、
幾年、上った先には新たな壁、しかし振り向いてみると壮
大な景色が広がっていた。

人生という名の映画

洞斗 留真

彼は映画を制作している。昔からずっと。その映画には彼
が主役として出演しているのだ。



空

津田 梅男

僕が手を伸ばした空の青は輝いていた。きっとその先の
未来も輝いているだろう。

夏休み

六甲の桃田郎

夏休み最終日、彼は忘れ物に気づき、やり直す必要性を悟
った。



寄り道

二代目BZ

右の大通りを行けば家に帰れたが、彼は左へ行った。その夜、彼は一人だった。海が彼を待っていたかのように、波打った。

後悔

鈴木一郎

やってしまった、と彼は気づいた。だがそれは遅すぎたのだ。もう、彼の周りには誰もいない。彼は今、星空の下で一人たたずんでいる。



II 若気の至り

〈恋愛・青春〉

世界で一番短い恋

大福

私は一人の女性に恋をした。

彼女は見ることは出来ても触れられなかった。

氷菓

折木 奉太郎

熱いある夏の日の午後、僕は一人でいた。とても熱さに耐えられなかったので、「あの人」が最後に遺した氷菓を食べる。傍には、季節外れの彼岸花が咲いていた。

- -
 -
 -
- ただ冷たい。



芸能人

ナス

誕生日も身長も知っているし、好きな食べ物も嫌いな食べ物もわかっている。だが、僕のそれを知っている可能性はない。二人の距離は一生縮まることはないのだ。

布袋jr.

かんせい

baby baby baby baby baby baby 俺の全てはお前の物
や

うまく行くと思ったがダメだった



エリカ

H.C.K

発車ベルが鳴った。走らなきゃ、僕は思った。結局、間に合わなかった。

エリカは行ってしまった。冬がやってきたんだ。

後悔

NY

「君は過去に戻れたら何がしたい？」答えは返ってこない。
「僕は戻るんだったらもう一度君に会いたいな、」気がつくくと一人で泣いていた。



命題「大人になるのはいいことである」

雪村少年

「大人になってよかったことは何ですか？」少年は尋ね回った。しかしまともに答える大人はいなかった。「誰でもいいから教えてくれよ、将来はいいものじゃないのかよ！」

シュート

八実

残り3秒、2点ビハインド、厳しいマーク。未だリングに通したことはない6.75mの半円の外にいる彼に、仲間からパスが回る。



『日々』

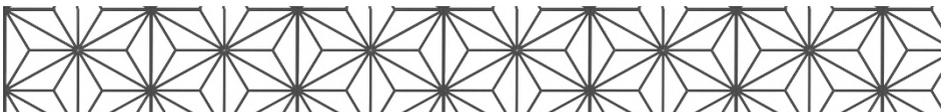
江川 守

こんな日々を待ち続けていた。
まだ知らないこれ以上ない日々。
この日々を後悔しないだろう。

無力

ピロ助

あいつはあやまちを犯そうとしていた。オレは見ることに出来なかった。



夜

真夜中に駆ける

夜に歩いていたら、周りには自分以外いなく。耳に音楽だけが聞こえていた、しかしそれを見るとなぜか冷たい物が顔をつたった、これは……

教えて

名無し

君が居なくなってしまう前に、最後のお願ひ。「僕にさよならの言い方を教えて」



最果て

遠くでみんなの笑い声がする。
そして、僕はほっと息をつく。

鈴木律



III すらまっばぎー

〈日常〉

自然の声

初々しい初陣

「桜ももつと見てほしかっただろうねえ」静かな春、おばあちゃんは言った。

「気づいてくれたんだ」やわらかな風が答えた。

すみれ

Y

私は見つけた。道路の端に咲きそうなすみれを…



弱さ

桜井花

満開の花が咲いていた。美しく、トゲなんかついていた。
通りかかった大量の鳥たちがつつき、花は自ら花びらを落
として、枯れた。

終わらないもの

アイシールド∞

気づけば夜の10時。彼はこれまで積み上げてきたチリの
山を崩すように必死でシャーペンを動かしていた。明日か
ら二学期というのに泣



想像

橋 きょう

「やばい」必死に勉強していた。テストで良い点を取るのを思い浮かべた。ふと気がつくとき窓は明るくなっていた。

あめ

へのへのもへじ

明日、警報出ないかな。ぼくはまだ宿題がおわっていない。



T 先生

失部した男

今日もやってしまった。罪悪感を胸に早足で家に帰った。
電話のコール音が家に響いた。その電話は察しの通りあの
先生からだった。そして僕は大切な物を失った。

毎日

暇人

彼は目を覚ましてしまった。



田舎

32.N

朝起きると、全く違う音だった。パトカーの音もなく、工事の音もしない。

そこで、僕は、自分がいる場所に気づく。

コーヒー牛乳

きむたろう

朝、母に起こされ、目が覚める。時間を見る。まずい。急いでコーヒー牛乳を飲み、電車に乗って学校へ行く。すると、お腹に異変が。トイレにかけこみ、危機を乗り越えて一安心。そして思う。「学校遅刻した。」



目覚め

小鳥遊 紡

朝日が登り、私の意識が覚醒する。普段より早かったので再び意識が深い闇に沈ませる。「あと5分なら大丈夫」と思っていた自分を後悔しながら私は足を動かす。

非日常

スジャー タ

朝起きて歯を磨き、朝食を食べ制服に着替える。いつものように。ただ、昨日とは何かが違う気がした。その正体がわからぬまま、いつもの時刻に家を出た。



割り箸

銅

朝、食事をする時彼は割られた。昼、今度は「新しい」彼が割られた。昔の彼はもういない。夜もまた新しい彼が割られるのだろう。

1日

ゴイゴイ

「学校行くのしんどいなあ……」「授業早くおわんねえかなあ……」「部活早くおわんねえかなあ……」「もうこんな時間か……」僕は眠った おはよう☺☺☺☺



星座

錯乱坊

『7:01 今日の運勢第1位はかに座のアナタ！おめでとう
ございま〜す！』ああ私、今日かに座だわ。

真実

小泉

僕たちはみんな知らないフリをした。そこには何があった
んだろう。誰がそんなことしたんだろう。もう誰にもわか
らない。



悪魔

おぼろそ

私の目の前に悪魔がいた。悪魔はどんどん巨大化していった。体を奮い立たせ、必至に戦ったが勝つことはできなかった。

孤独

きゆうり

僕は深い穴の中にいた。一人で糸を登っては、何度もハサミで切られてく。そいつらは仮面をした。



仮面

升田 哲

私にはもう何年にもなる親友がいる。だが、彼らは常に仮面を被っている。
いや、彼だけでなく周りの人全てが仮面を被っていた。その光景を私は
仮面越しから見ている

夢

まくら

僕はまだ先があるのだと思っていた。そう思っている方が楽だから。不快な音が聞こえ始める。またね、そう言い残して彼は消えていった。さて、何をして待とうか。



影の住人

雨フットー

影の住人は獲物が現れたら、痛めつけるだけ痛めつけて、
また影に帰ってしまう。

夜

小島 達夫

興奮した日曜日もうすぐ終わる。僕は一分が川の流れの
様に感じる…



八月十五日

鯉

坂の下に彼がいた。陽炎でぼやける。結局こちらには気付かなかった。それでよかった。

微笑み

ミルクティー

真夏の夕暮れ。ふと隣を見ると、あの人は笑っていた。



太陽

アルミカン

僕が出ている時『暑い』って言われる。
僕が隠されている時『寒い』って言われる。
どうしたらいいんだろう。

監禁？

春

俺は最近調子が悪い。とおもっていたら、また閉じ込められている。ここから出せ！

「病院に連れて行くだけだから、キャリアケースの中でおとなしくしてね。」



日常について

ホウキ

仕事帰りの彼は音楽を聴き、部活終わりの彼女はマックに行く。僕らはいつもラクダに揺られながら、砂漠をさまよう。

肥満

細身

彼は太っているのに気がついた。いつから太っていたかは誰も知らない。



自然

うめまる

山々や海々は、確かにいつも通りどっしりと構え私たちを見守っていた。

しかしその日はやけに鳥たちが騒がしくしていた。

猿

チャン ジュン

「痛い。」小鳥のさえなりに驚かされて、手を滑らせてしまったようだ。そのあと、小鳥が木の実を落としてくれた。



時

カメ公

その人はいつその時が終わるかを考えずに歩いている。
トラックが近づいていることにも気づかずに。

赤信号

高橋 海

今日も僕は朝から人々の安全を見守る。
その自動車の人！まだ人が渡っていますよ！



take over

東海道中 「のぞみ」

今も走るのだろうか、あの線路脇の塗装の流れた車両は。
時速300kmの車窓からそんなことを考える。

NON SUGAR

ちぎん こつか

佐藤くんの両親がこないだ離婚した。彼がいつもの喫茶で
ブラックをたのむようになったのもその頃からだ。



無題

タルト

黒い鼻を湿らせながら、
奴はパンの耳をほおぼった。



IV 二文間の冒険

〈SF・冒険・ミステリ〉

ガードレール

カポ

僕はガードレール。毎日、車を何台も見ている。そして思った、ポルシェほしい。

138 億光年

トレイル(まも)

「君は、宇宙の果て、まだ見ぬ世界へ行ってみたいと思うか？」

そう書かれた看板の下を僕はくぐった。



再帰

くすり

人類は労働からの解放を願った。1999年、人類は遂に人と
そっくりの新しい知能を作り出した。
そして現在、彼らは人類を神と呼び、彼らもまた労働から
の解放を願って…



アルピナ

もやし

ある所に白い服を着た女がいた。また、ある所に黒い服を着た男がいた。二人は時を止める力を持っていた。二人は闘った。世界は止まったままだった。

雪、無音、白

ひなきゆん

彼は倒れていた。白く冷たい雪の世界で。白、白、無音。彼は眠る

ー光が差す。プロペラの回る機械の音、自分を呼び起こす声。目を覚ます



飛翔

礎星乱三

彼等は深淵より光の中に飛び立つ。希望に満ちて。帰る場
所が無いことも知らずに。

羽

春巻き

鳥がたくさん南へ向かっていた。
何だか無性に飛行機が欲しくなった。



ドアの境界

下都

彼はドアを開けた。大空へ羽ばたけるような気持だった。
彼はドアを閉める。羽がなくなったような感覚だった。

いづくに

ダヒヨ

彼女がタピオカを落としたとき、タピオカは波にのって転
がり続けた



景色

僕の目の前に死海が広がった

塩パン

最後

名無し

彼は終に立ち止まり、来た道を顧みた。
ひどく深い谷や険しい山々が広がっていた。



濡れ衣

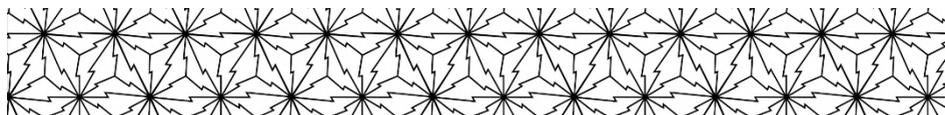
stardust

僕は今、彼に自白を強要させようとしている。
ただ、僕だけが本当の犯人を知っているのだが。

ヒーロー

高岡 日向

僕の中のヒーローは、ある日突然いなくなった



パリにて

伊達卷宗

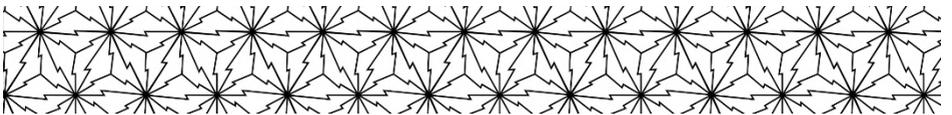
思っていたより何も無い。東京はあれほど息苦しいのに。身体の内側から凍って行く。自分が誰かも分からないまま。

悪魔の妹

レミイ

暗い部屋に彼女は独りぼっち。真紅の部屋に飛び散る羽毛。誰かが入ってくる。

「次は貴方が遊んでくれるの？」



閃光

でほほ

空を見上げたその時、大きな物体が落ちてきた。物体が地上に落ちた瞬間、地上が光った。その後は誰もわからない

あいつ

きんぺい

僕の目の前にあいつがいた。今、あいつが動いたようだ。



げん覚

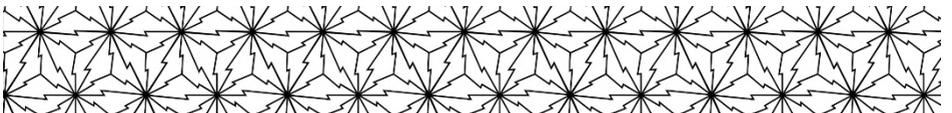
フランケンウイニー

ピピッ。三十九度二分あった。天井を見ていると天井が巨大に成長して自分が小さくなった。何にも干渉できないほど。自由と虚無を感じた。

進歩

浮阿鳥

朝、鳥の囀りが聞こえた。僕は瞳を閉じたままだ。少し経って不快なアラーム音が聞こえた。僕はヘッドロを飲み込んだような気分を抱えながらも体を起こす。その直後、鳥が飛び立ってしまった羽音が聞こえた。



遠い現実

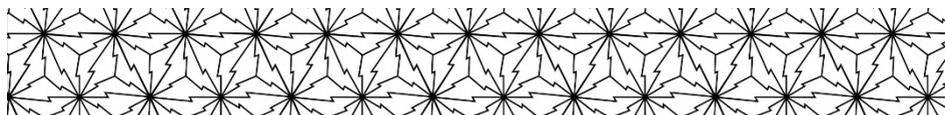
ホームセンター

彼は今を理解していない。なんだろうこの慣れてしまった恐怖は。
日常なのか、非日常なのか。

植物

みずたろう

今夜、この星で最後の人類は植物となった。彼のそばには百合の花と桜の若木が生えていた。



V 半分、黒い。

〈ユーモア・ダークユーモア〉

最近さらに酷い

15

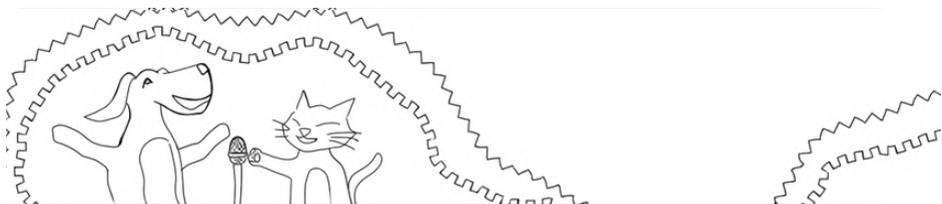
しかし、抵抗は出来ない。もう少しで引き上げられるという瞬間、針を外して海に逃げこめてしまった。そのまま海の底に落ちていく。
かくして寝坊するのである。

やばっ

フェラーリの電動ドアになりたい

朝5時、彼は目覚めた。

絶妙な安堵と喜びを胸に、再び布団に潜った。
10秒後、彼は遅刻した。



チャーシュー

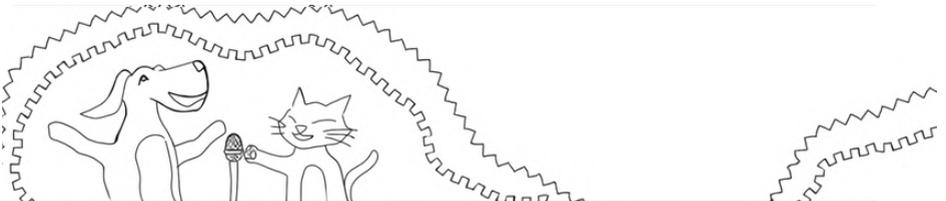
激アツ瀧ちゃん

彼はチャーシューを食べる 熱くて食えん すべて食べ
た まだ残ってるぞ
こんチャーってね

蒼い曇天

大御所^おお笑い界

彼は言った。「どうして空って……青いんでスカイ」
空は蒼く彩られていた。それは残酷なまでに美しかった。



真理尾

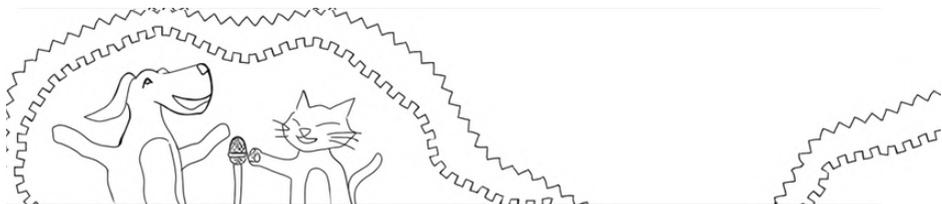
へビースモーカー

僕はマロンという腕利きの殺し屋だ。ある日僕に殺しの依頼がきた、「とあるおじさん」を殺せというものだ。僕は猛毒の赤いキノコで殺そうと考えた。そしてターゲットにキノコを食べさせると謎の音と共に巨大化した。

天気雨

おむつ爆弾

おむつを替えてあげよう。そう思った。しかし、赤子の砲口は私に向いていた。私は急いだ。そして、替え終わった。わたしははずぶ濡れだった。今日は快晴のはずなのに。



お高い買い物

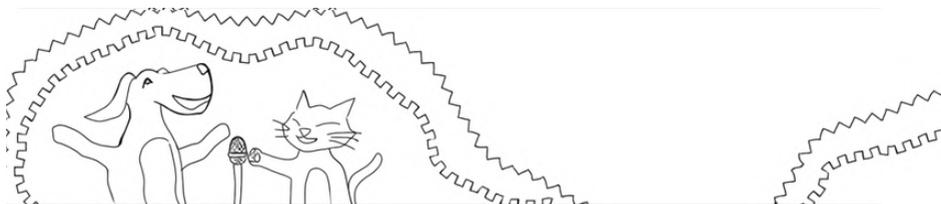
鷹羽 周介

世界に一つのお宝が買える百万円均一。私は一か月前に壺を買った。商品が壊れたらタダで新品と交換できるらしい。もう二度と行かない。

輪廻転生

2次元に彷徨いし者

ある時、ネコが生まれた。「えっ、またネコ！これで100万回目だぞ。いつになったら他の生き物になれるんだ。」



依存

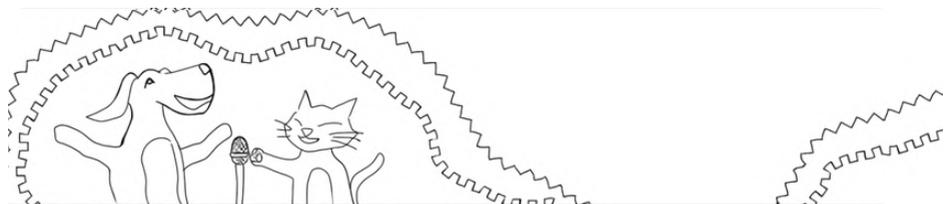
泥棒猫

それは彼を飼い、彼の時間を蝕んでいく。しかし、彼はそれに気付かない。

ガチのバトル

中山春二

「二浪一留一停二退」のリア充男と九浪で東大理Ⅲに行った男、京大中退高卒学歴厨がテーブルに座っていた。「一体この三人の中で誰が1番幸せなのか」彼らは熱い討論を始めた。



蚊帳の外

星凜

白人、黒人、黄色人の三人が同じテストを受け、競い合った。結果、皆同じ点数であったので、彼らは話し合って順位を決めることにした。白人は言った「白人の俺が一番に決まっているだろう」すると黒人が「いや、それは差別だ」と言った。白人が「では、君が一位で、俺が二位だ」と言うと黒人は笑って頷いた。

「夢」

H・H

彼は目覚めた。ひどい頭痛がしている。彼は将来の夢を考えているという夢を見ているという夢を見ていたのだ。

「疲れた。」そう思った。



GAME

隠者

三人の男が賭けていた。それぞれ身分はまるで違う。めくられる五枚の紙。二人の男は紙を卓に叩きつけたが、残る一人は出来なかった。

感染

アベノマスク

彼らは飛沫を飛ばし合いながら、犯人探しという負の連鎖に感染した。



人と木

信

僕はある木を見つけた。その木は人間に切られ、半分なかつた。

僕はその木が悲しんでいるように見えて、人間の愚かさを感じた。

人と鬼

僧帽筋の申し子

ある日人は鉄砲と大砲で鬼の土地と自由を奪った。次の日鬼は人を退け人の土地と自由を奪った。



檻

椎 悠輔

彼が目を覚ますと檻の中にいた。前には「ヒト」と書かれた看板があった。檻の外には人ではない何かがあった。

死神と蠟燭

山田 太郎

死神が僕にささやいた。僕は短くなった蠟燭を見て、力を抜いていった。

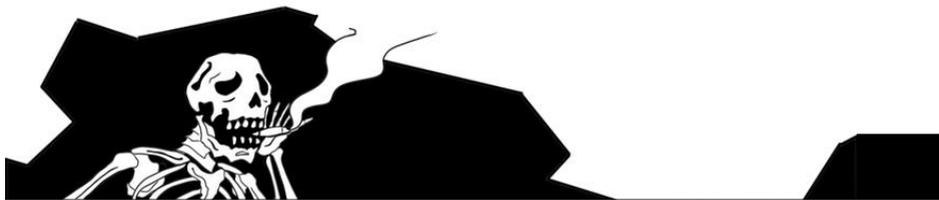


キモオタ

ヤミサー見張り

僕はアニメなど二次元を見て興奮している輩が嫌いだっ
た。

今、部屋に1人きり、テレビではアニメが流れていた。ど
こからともなく、「でゅふでゅふ」という下品な声が聞こ
えた。一体いつから…？



VI 屋根裏の哲学者

〈哲学〉

人形達

Y.N

人形は自分で考えていると錯覚していたけれど、人形使いが操っていた。けれども、人形使いもまた人形であった。

心は、どこ。

光

始めに彼がいた。彼には「それ」が無かった。彼は「それ」を持っていないことを知っていた。彼は「それ」をほしいと願う。「それ」は彼と共にあるが、変わらず彼は願う。



俺とは

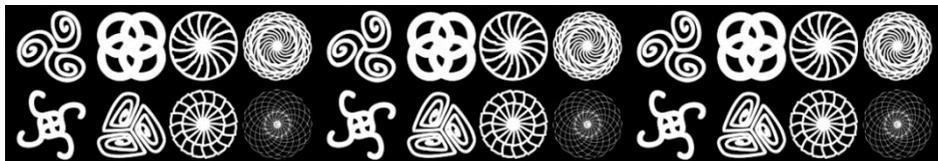
フサル

俺はふと考えた、俺とはなんなのか：俺にはナニがあったのか、ナニがなかったのか：それを考えてるうちに俺だけでなく、地球とは、宇宙とはなんなのか考えるようになった。そして気付いた時には何もわからなくなっていた。

僕

青年 H

僕の名前は？そもそも名前とは？僕が存在する目的はこの孤独はいつまで続くのだろうか。僕は地球なのだそうだ。



傷つけ合い

タケ

彼は僕の知り合いだ。彼は人が人を信じることを信じない。僕は彼を信じることを信じる。ぼくらは誰かの為につまづき、いつも傷つけ、逢うように出来ている

炎色反応

無垢鷹

炎の中に金属や塩類を投げれば各々素材特有の色を示す。存外人間も似たようなものだ。人と人が関われば何かしらの反応が生まれる。その色は色とりどりの花火のように全く違う色を導き出す。と花火を見ながら一人思う。



頂

しんの

その人は、頂にて茫然としていた。得た少しの名声と、全てを包み込んでしまいそうな虚無感と共に。

文明

スマホ変えたい

昔は一緒に遊んでたのに、いつかあなたは僕をシーソーに乗せて僕を高く上げました。もっともっと上げるために、私より重いものをいくつも乗せて、上げました。あんまり高いのであなたが小さく見えます。



代償

衛門

その時、彼女は家族を取り戻した、しかし家族は悲しそう
だった

熊

asimnitsuto

豪華客船が影を切り裂き、緑が支配する傷跡が脂で焔めく。
狩られる恐怖の鉄はカネになる。

熊は一部始終を見ていたけれど、すぐに去っていった。



本物

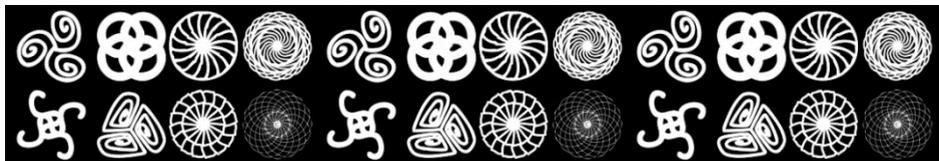
N

ある日、男は久しぶりに外に出た。通りを歩いていると、男は友達を見つけた。そして声をかけた。しかし返ってきいた言葉は「誰？」だった。男はしばらくその場に立ちつくしていた。すると突然声がかかった。ふりかえるとそこには本物の友達がいた。

中毒

キューブ

僕はまだそこで終わりたくなかった。しかしもう我慢出来ない。今までの我慢が目に見えるような形で現れている。もうダメだと思った瞬間、心は軽くキレイになった。しかし、手は汚れてしまった。



川

菊一文字

私は時に強く、時に優しく動いていた。そのまま私は海へ向かう。

日本

カンダタ

私を殺めた黒の仮面の集団は仮面をとり、私の死を泣いて悲しんだ。そしてまた仮面をつけて彼に襲いかかる。仮面が割られる前に集団は消え去った。



善と悪

洗明 貴防

彼は憎そうに話した。奴らは徒党を組むし、相手の邪魔ばかりする悪い人達だ。彼は目を煌めかせた。彼らは力を合わせて、企みを打ち壊す英雄なんだよ、と。

足りなかったもの

ジョン万次郎

男は貧しい家の生まれで、嘘を重ね周りを出し抜き巨万の富を築きました。彼は金で手に入らないものは無いと信じ切っていました。しかしある日を境に彼は自ら行方をくらましてしまいました。



取れない眼鏡

ルディマール・ヘルマン

「全世界の人間は眼鏡をかけている。勿論私も、そして君も。レンズが違えどフレームがなくなることはないだろう」と言われた私の眼鏡はボロボロだった。

それぞれの正義

辻 日雄

麓を見た。視界には人しかいない。人しか見えない。「わが人の役目なのか」無機質に言った。



4つ葉の

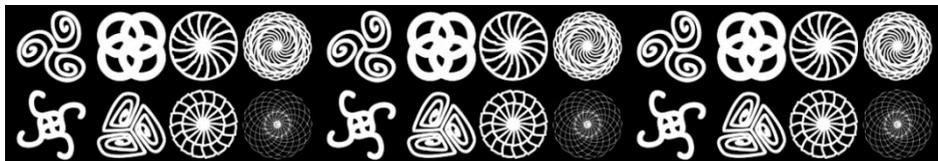
珪心

葉が出た 踏まれて 幸せの象徴になった

葛藤

夜見納

またあの男だ。此方にやって来て何時も言うんだ。「この世界は血腥い。欲に塗れ、光と闇が錯綜している。誰が為に華は咲き、舞い散るのか。」気が付けば晦冥の中、血塗られた白薔薇が一輪寂しげに輝いていた。



VII 交響曲第9番

「80期より」

花

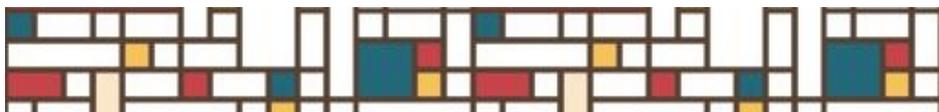
はなさか じいさん

豊饒な地に美しい花があるわけではない。まだ誰もみつけていないのだから。

月下美人

瀬戸内ジャクソン

朝は毎日バラが咲く。昼にはハナミズキが咲いていて、遂に自分を咲かせた夏の日のサマーカーニバルとカーペンター。短い夜には月の光に照らされて
月下美人が美しく散る



才能

松本 長

花が散った。それは儂く、美しく、そして惜しみないよう
に見えた。

金星

新しい新品

彼女は自分の力だけでは輝くことができない。でも自分の
力でステージに立って、仲間の力を借りることができれば、
一番輝くこともできる。



応援

彼は応援する。

喜びと悲しみが混ざった世界にいても。

「僕は応援する。」

ゆり

僕

梅茶

あなたは「あなた」。彼は「彼」。彼女は「彼女」。僕は誰？



狂争

KAKO

昨日の敵は今日の友、今日の友は明日の敵、明日の友は明後日の敵。連鎖は続く。

普通

岡崎 みなほ

いつも、普通だと考えていた事が無くなった時、人は普通でいられなくなる。



忘却

雪織 祠音

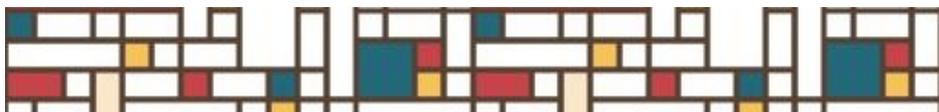
忘れたい。忘れたい。忘れたい……。しかし、忘れることは出来ない。忘れたいと思うものほど人にとって大事なものである。そして人は本当に大事なことは忘れられないようになっていく。皮肉なことだ……

世界一の大馬鹿者

オペラ座アンドルー

ムダ。ムダ。本当にムダ。なぜそんな事をするのか分からない。

嗚呼、本当にバカなのだろう。でもそれにどうしても惹かれてしまう。そんな僕は……



神

3150

神とは何て身勝手なんだろう。本当に存在しているのだろうか。何処にいて何をしているのだろうか。責任はとつてくれただろうか。

扉

藪野 ゆう

目の前には扉があった。その扉の向こうは光かヤミか。この扉を越えることは何の意味を持つのだろうか。



夜

かばヲ

暗闇。それは誰にでも平等に訪れる。

人生は日の出から始まる

からくり

人と太陽はどこか似ている。高いところにいられるのはほんの一瞬だ。



北極星

ゆきだるま

夜空に浮かび続ける道標は二等星
導かれていく彼は一等級

つよいつてなんや

李婆 好男

つよくたくましい、鋼鉄の棒のようなところ。それがいつ
に折れたとき、ばらばらになった。

よわよわしい、かわいた粘土のようなところ。ちぎれても、
粉々になっても雨の後には固まった。



人生

地内裕翔

僕は、生まれた時から死ぬまで、僕が操るマリオネットになっっている。

Veil

芦屋川龍之介

あなたのその顔に張り付いた気持ちのない笑顔はなんですか？



G

安野雲

奴らは歩いて、暗闇の中を。奴らは嫌われる、人間に。奴らは死んでいく、叩かれ床に捕われスプレーをかけられて。奴らは生き続ける、どれほど死のうともどこかで生き続ける。

アンパンマン

D

新しい顔が投げられ、古い顔のかわりにそこにおさまった。さて、古い顔は一体何処に行ってしまったのだろうか？



草

草生えた。素晴らしいことだ。
シイタケ生えた。素晴らしいことだ。

水谷



あとがき

本のぬくもり

持っているだけで満足出来る本というものがあります。眺めているだけで落ち着く本があります。表紙を見ただけで泣ける本もあります。

完成された本には人を惹きつける力があると僕は感じます。それらは本の内容が素晴らしいというだけでなく、本文を支えるすべての要素が洗練されています。僕はもともとそんな不思議な魅力を持つ本が好きで、本を本たらしめる編集の仕事にも興味があり、編集委員になりました。

どんな作品があるかと思いつながら初めて 80 期生全員の記事を読んでみると、この文集を読んで頂けたらわかる通り、社会問題に一石を投じるようなものから、クスツと笑えるものまで幅広いジャンルがあつて、読者として楽しみながら読みました。

どうやったらよりこれらの作品の良さを昇華させて伝

えられるか、大切にしてもらえ一冊にできるか、委員みんな考えてながら手探りで編集作業を行い、僕たちに出る限りの工夫を凝らしました。80期の作品の良さがより多くの読者の皆さんに伝われば幸いです。

編集委員 鈴木律紡

編集者の創作者なる

私はもともと本を読むのが好きでした。その上、独創も好きで一時期は自身のSNSアカウントでポエムを書いていたこともあります。今回、皆で一つの小説集を作ろうというところで、皆の作品をじっくり読みたいという好奇心からこの編集委員になりました。皆の作品は絵に見えるほど面白くて、うまかったです。この小説集が出来るだけ多くの方々に読んでもらえることを切に願っています。

編集委員 浅葱トコ

あとがきについての一考察

あとがきを最初に読む人がいると聞いたことがありません。僕は小説におけるあとがきは、読んで字の如く本編を読んだ「あと」に読むものだと考えます。情報が混沌と入り混じったインターネットに対し、小説の良いところはある程度の順序性があることです。その順序を守ってはじめてから作品を味わうことが作者に対する読者のマナーではないでしょうか。多くのあとがきは作者が作品を完成させた後にその作品を振り返るものであって、作者自身と読者の数少ない接点です。稀に聞く、あとがきでネタバレして欲しくないという考えは読者の自分勝手な言い分であり、作者の権利を迫害しているものではないでしょうか。一編集委員として作品を作り上げた報酬という自分勝手な名目で、ここに自分の意見を表明させていただきました。最後に、一緒に編集委員の仕事を頑張った委員の仲間と、この短編集の作者である 80 期全員に深くお礼を申し上げます。ありがとうございます。

編集委員 楠田力基

完全パングラム

皆さんは「言葉遊び」を面白いと思いますか？僕は大好きです。ダジャレも言葉遊びですし、ひらがな46文字を一つずつ使って文章を作るマニアックな遊びもあつたりします。日本語は複雑ですが、だからこそできる遊びがあるのです。

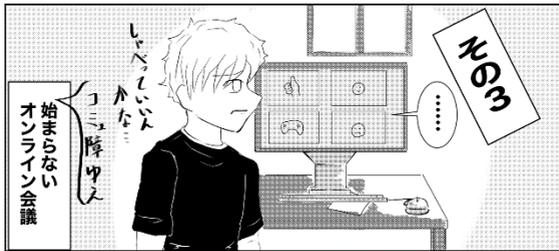
もちろん小説もよく読みます。これまで授業で扱われたものにも好きな作品があるので、皆さん内容を忘れているかもしれないので短くまとめておきますね。

ほらかそへなり わるのやつ むこいもうとをみせた さあ
ひおちぬまにゆけ ふくきてねえんよ はしれめろす

(ほら過疎へなり 悪の奴 媚妹を見せた さあ陽落ちぬ間
に行け 服着てねえんよ 走れメロス)

編集委員 高橋佑典

編集系女員の辟土



全作業を終えて

いかかでしたか？皆それぞれの魅力のある作品だったように感じます。今回編集作業を通して、自分の実力というものを再認識できました。ほとんどの作業を他の人たちにやってもらう形になり、自分のふがいなさに辟易としてしまいました。色々と任せてしまった他の委員には感謝でいっぱいです。またこのような機会があれば自分から率先してできることをしたいと思いました。

好きな小説を編集するという経験を得ることができ、とても参考になりました。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

編集委員 六戸光太郎

【「世界一短い小説」編集委員メンバー】

浅葱 トコ

楠田 力基

宍戸 光太郎

鈴木 律紡

高橋 佑典

武部 航

世界一短い小説

2020年9月15日 初版第一刷発行

発行元 「世界一短い小説」編集委員

印刷所 六甲学院印刷室

製本所 六甲学院予備教室4

表紙画 武部 航

ロゴデザイン 高橋 佑典

本文レイアウト 楠田 力基

*本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は著作権法上での例外を除き禁じられています。*乱丁本・落丁本は編集委員宛てにお送り下さい。お取替えいたします。*本書の内容についてのお問い合わせは編集委員にお願いいたします。



世界一短い小説